

# 26P-am05S

*Thevetia neriiifolia* 種子のカルデノリド配糖体と腫瘍細胞毒性 (2)

○石原 舞<sup>1</sup>, 黒田 明平<sup>1</sup>, 井口 巴樹<sup>1</sup>, 米山 由里香<sup>1</sup>, 藤野 智史<sup>1</sup>, 早川 磨紀男<sup>1</sup>, 梅村 直己<sup>2</sup>, 坂上 宏<sup>2</sup>, 三巻 祥浩<sup>1</sup> (<sup>1</sup>東京薬大薬,<sup>2</sup>明海大歯)

【目的】 演者らは、天然からの新規抗がん剤のシーズ探索を目的に、キョウチクトウ科 *Thevetia neriiifolia* 種子の成分探索を行ってきた。その結果、これまでに 10 種のカルデノリド配糖体を単離し、それらの構造を明らかにした。<sup>1)</sup>今回、引き続き *T. neriiifolia* 種子の成分探索を行ったので報告する。

【実験・結果】 *T. neriiifolia* 種子 (2.0 kg) の MeOH 抽出エキス (250 g) を Diaion HP-20 カラムクロマトグラフィー (CC) に付し、20% MeOH, EtOH, EtOAc と順次極性を下げて溶出させた。EtOH 溶出画分 (100 g) について、順相および逆相シリカゲル CC を用いて分離・精製を行い、1 種の新規と 7 種の既知カルデノリド配糖体を単離した。二次元 NMR (COSY, HMQC, HMBC) を中心としたスペクトル解析の結果より、新規カルデノリド配糖体の構造を **cannogenol 3-O-β-D-glucopyranosyl-(1→4)-α-L-thevetopyranoside** と決定した。

これまでに本植物より単離している化合物のヒト白血病、腎がん、肝がん、および口腔がん細胞に対する細胞毒性および腫瘍選択性についても報告する。

